

ギーを与えて下さっている。これからも教員、職員と学生が一丸になって、本学科歴史の新たな一頁を創っていく所存である。

生物資源管理学科のこの1年

須戸 幹

生物資源管理学科長

学生の動向

2015年3月に卒業生61名を送り出すことができた。就職した学生は37名で、うち公務員は5名であった。また、大学院には本学10名、京大3名、東大、名大、神戸大、大阪府大、奈良先端に各1名が進学することになった。それぞれの就職先、進学先で、本学科で学んだことを基礎としてますます活躍されることを期待している。

これまで就職活動は、3回生の12月に就活解禁、4回生4月に選考開始、10月内定のスケジュールで動いてきたが、これが最後になる学年かもしれない。例年通り、学生が内々定を得た時期は4月から年明け後までと幅広い。本学科は卒業研究が農事歴とともに進む場合が多いため、就職活動と実験・研究が重なる。それにもかかわらず卒論発表会で全員が1年間の成果を発表できたことは立派であると思う。

一方、就職希望者に対する内定率は86%であった。個別に事情があるため単純に比較することはできないが、過去5年間の90%以上と比べて今年は低い数字となった。学生個人の希望を踏まえつつ、就職希望者に対しては就職支援に対する教職員のより一層の努力が必要であることを痛感している。

入試倍率は前期試験が3.4倍、後期試験が14.4倍で、例年並みの結果になった。龍谷大学が瀬田キャンパスに開設した農学部の募集が今年度から始まり、受験生の競争を心配していたが、入試倍率をみる限り初年度は大きな影響はなかったようである。しかしこのことは、「生物生産と生物機能を適切に制御、管理する知識と知恵を学び、循環型社会の形成を目指す」をキャッチフレーズに、これまで以上に本学科の魅力を発信していく必要性をあらためて認識するきっかけとなった。

学科の動向

今年度は、個体群生態学・行動生態学分野の高倉准教授が4月に着任された。本学科には昆虫、爬虫類、哺乳類などのさまざまな動物に興味を持つ学生

も多いが、経験と実績のある高倉先生が赴任されたことは心強い限りである。

一方で、岡野先生、小谷先生、上田先生が定年退職されることになった。3名の先生方はいずれも県立短期大学時代から長年にわたり教鞭をとってこられた。県立大学では、岡野先生は家畜の栄養生理機能、小谷先生は微気象学的観点から見た物質輸送、上田先生は土壌微生物と湖沼環境をそれぞれ柱として、さまざまな研究活動を精力的に行い、多くの卒業生、大学院生を送り出された。また、学生指導、大学運営にも多大なご尽力をいただいた。3名の先生方が一挙にご退職されるのは痛恨であるが、今後はこれまでのよき伝統を守り、さらに発展させることが残った教員と新たに赴任するメンバーの責務であると考えている。

環境科学研究科

環境動態学専攻のこの一年

鈴木 一実

環境動態学専攻長

2014年度も環境動態学専攻における学生の出入りは比較的順調でした。2014年4月の博士前期課程への入学者は15名と募集人員を3名下回る結果となりましたが、博士後期課程へは3名が入学いたしました。2015年3月の博士前期課程の修了者は22名で、内訳は生物圏環境研究部門：3名、生態系保全研究部門：12名、生物生産研究部門：7名でした。4月以降の新しい環境でのご活躍を祈ります。また、博士後期課程では4名の方が晴れて学位を取得されました。渡部俊太郎さん(Multi-scale genetic structure and reproductive characteristics of *Machilus thunbergii* Sieb et Zucc)、金尾滋史さん(琵琶湖周辺域における水田利用魚類の保全生態学的研究)、舟尾俊範さん(ナマズを中心とした水田利用魚類の繁殖生態および保全に関する研究)、殷安斎さん(Dinoflagellates from Hainan island: Potential threat for transporting harmful algae from Hainan to Japan)の4名です。これまでのご努力に敬意を表すと同時に、今後のご活躍を期待いたします。一方、2015年4月からは博士前期課程へ20名、博士後期課程へは5名が入学あるいは進学する予定です。

教員にも若干の入れ替わりがありました。2014年4月には高倉准教授を迎えることができました。